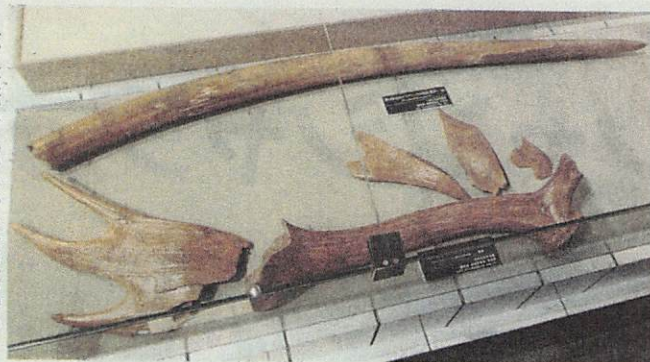
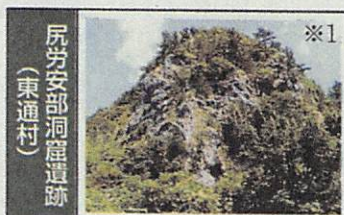


東北歴史探訪 旧石器時代中

出土品が語る 海峡往来



花泉遺跡で見つかった大型動物の牙や角の複製（県立博物館で）



尻労安部洞窟遺跡（東通村）



東北地方の旧石器遺跡

花泉遺跡（関市）

富沢遺跡（仙台市）



黒曜石の石器

※1 尻労安部洞窟調査団撮影

※2 大石田町立歴史民俗資料館所蔵

4万年前から始まる後期旧石器時代は、現代人と同じ「新人」が日本列島で暮らし始めた時代だ。東北地方では、ナウマンゾウなど大型動物の牙や骨が大量に見つかった一関市の花泉（金森）遺跡、2万年前の水河期の森が地中からそのまま出土した仙台市の富沢遺跡など、研究史に残る著名な遺跡が多い。近年も旧石器人の活発な活動を裏付ける発見が続いている。

■小型動物も狩猟対象

石器で作った槍を手にナウマンゾウやオオツノジカなどを追い回す。旧石器人の狩猟の一般的なイメージだろう。

小型動物も狙った旧石器人の狩りの多様性が証明されたという。

歯の科学的分析から、このウサギが生息していた時代は2万年前。当時は平均気温が

う。だが、青森県下北半島の東通村で発掘調査が進む尻労安部洞窟遺跡では、石器と共にウサギの歯が大量に見つかり注目を集めた。

「ウサギは夜行性で、昼間に捕まえる動物ではない。巣穴からおびき出す『威嚇』や、わなを仕掛けて捕らえた可能性がある」。調査を担当する慶応大の佐藤孝雄教授によ

ると、大型の獣だけでなく小型の動物も狙った旧石器人の狩りの多様性が証明されたという。

歯の科学的分析から、このウサギが生息していた時代は2万年前。当時は平均気温が

う。だが、青森県下北半島の東通村で発掘調査が進む尻労安部洞窟遺跡では、石器と共にウサギの歯が大量に見つかり注目を集めた。

「ウサギは夜行性で、昼間に捕まえる動物ではない。巣穴からおびき出す『威嚇』や、わなを仕掛けて捕らえた可能性がある」。調査を担当する慶応大の佐藤孝雄教授によ

ると、大型の獣だけでなく小型の動物も狙った旧石器人の狩りの多様性が証明されたという。

歯の科学的分析から、このウサギが生息していた時代は2万年前。当時は平均気温が

う。だが、青森県下北半島の東通村で発掘調査が進む尻労安部洞窟遺跡では、石器と共にウサギの歯が大量に見つかり注目を集めた。

「ウサギは夜行性で、昼間に捕まえる動物ではない。巣穴からおびき出す『威嚇』や、わなを仕掛けて捕らえた可能性がある」。調査を担当する慶応大の佐藤孝雄教授によ

ると、大型の獣だけでなく小型の動物も狙った旧石器人の狩りの多様性が証明されたという。

歯の科学的分析から、このウサギが生息していた時代は2万年前。当時は平均気温が

同じ型の石器や動物の痕跡

現在より7～8度低く、富沢遺跡で見つかった森林も寒冷地に見られる針葉樹だった。より北にある下北半島は厳しい寒さだったとみられ、ウサギは毛皮を確保するために重宝された可能性がある。

種類は、寒冷地にいるユキウサギではなくノウサギ。当時、北海道と青森県の間の津軽海峡は幅が狭く、冬季だけ陸続きになる「氷の橋」が出来たという説がある。大型動物は本州に渡ったが、小型のユキウサギは途中で凍死するなどして渡れなかったとみられる。氷の橋の存在を裏付ける成果にもなった。

■人も海峡を行き来？

旧石器人も津軽海峡を渡ったのだろうか。

尻労安部洞窟遺跡では、北海道渡島半島のもと同じ型の石器が発見されており、氷の橋を通じた人の往来もつかえる。佐藤教授は「洞窟は石灰岩地帯にあるため骨が残

りやすい。動物の痕跡と石器に加えて人の骨も見つかれば、旧石器人の生活が詳しく分かる」と今後の調査に期待する。

北海道と東北の旧石器人の移動は、旧石器時代終末期の遺跡でも見られる。山形県大石田町の角二山遺跡で出土した約1万7000年前の黒曜石製石器の成分を分析したところ、北海道遠軽町の白滝産と判明した。

白滝から角二山まで直線距離で約600キロ。2015年に論文を発表した東北大の鹿又喜隆准教授は「一時的に凍結した海面の橋を渡ったか、渡航技術があったのかは不明だが、北海道から東北まで海を越える移動能力を持つ集団がいた」と話す。

約1万6000年前には青森県で最古級の土器が出現し、東北は徐々に縄文時代への移行を始めた。「津軽海峡文化圏」とも言われる共通の文化を形成した縄文時代に比べ、旧石器人の海峡移動を証明する遺跡は少なく限定的だが、交流の萌芽は確かにあった。

物流・観光の活性化期待

JR雪石駅1階の雪石町観光物産センターで、県内の工房が

り

ている。26日まで。しずくしい観光協会の主催